

- 1 課題名 栽培漁業推進対策事業
- 2 区分 国交付金
- 3 期間 昭和59年～
- 4 担当 養殖栽培部(濱地寿生・坂本博規)  
資源海洋部(土居内 龍)

5 目的

栽培漁業の推進を図るために対象種のマダイ、ヒラメ、イサキ、アワビ類について放流種苗の混獲状況等を把握し、放流効果を検討する資料とする。

6 成果の要約

(1) 調査方法

ア 放流種苗調査：マダイ・イサキは鼻孔隔皮の欠損、ヒラメは無眼側の体色異常を標識として放流種苗の有標識率を調べた。

イ 漁獲物の標識魚混獲率調査：マダイは雑賀崎漁業協同組合(以下、漁業協同組合は漁協と略記する)、湯浅中央漁協に水揚げされた0歳魚の標識魚(鼻孔隔皮欠損魚)の混獲率を調べた。ヒラメは雑賀崎漁協、湯浅中央漁協、比井崎漁協、紀州日高漁協南部町支所の水揚げ魚の標識魚(無眼側体色異常魚)の混獲率を調査した。イサキは和歌山南漁協の水揚げ魚の標識魚(鼻孔隔皮欠損魚)の混獲率を調べた。アワビ類は加太漁協、下田原漁協において水揚げ貝の殻頂部を削り人工種苗由来のグリーンマークの出現割合を調査した。

(2) 成果の概要

ア 放流種苗調査：マダイの有標識率は和歌山市加太放流群(尾叉長53～119mm, 調査数333尾)で5.7%と過去5年間(12.3～39.0%)と比べきわめて低くなった。なお、昭和62年以来放流を続けてきた由良町放流群は平成18年度で種苗放流を終了している。

ヒラメ放流種苗の有標識率は由良町放流群(全長64～100mm, 調査尾数100尾)、みなべ町放流群(全長52～96mm, 調査尾数98尾)とも100%であり、調査した放流種苗すべてに無眼側の体色異常が認められた。

イサキの有標識率は田辺市放流群(尾叉長27～63mm, 調査尾数286尾)が19.2%と過去5年間(23.1～57.6%)に比べ最も低くなった。

イ 漁獲物の標識魚混獲率調査：マダイの混獲率は雑賀崎漁協(11～12月, 調査尾数417尾)が0.2%であったが、湯浅中央漁協では調査尾数が53尾と少ないこともあり標識魚はみられなかった。

ヒラメの混獲率は、雑賀崎漁協(11～3月, 調査尾数364尾)で7.7%、湯浅中央漁協(周年, 調査

尾数1,387尾)で10.9%、比井崎漁協(9～3月, 調査尾数1,859尾)で9.5%、紀州日高漁協南部町支所(9～3月)で4.7%であった。

和歌山南漁協におけるイサキの混獲率(4～12月, 調査尾数2,992尾)は0.6%であった。標識魚は、2歳魚4尾、3歳魚10尾、4歳魚4尾、5歳魚1尾で、1歳魚ではみられなかった。

加太漁協におけるアワビ類の混獲率は、クロアワビ(調査個数120個体)で24.2%、メカイアワビ(調査個体数74個体)で90.5%となった。マダカアワビ(調査数383個体)は近年では1998年と1999年のみの放流で、標識個体の漁獲が年々減少していたが、今年度の調査でも前年度と同様に確認されなかった。下田原漁協では、メカイアワビのみの調査であるが混獲率(調査数126個体)は64.3%と年々高くなる傾向が見られた。

7 成果の取り扱い

(1) 成果の普及

各々の調査で各漁協に赴いた際に漁協職員や漁業者に調査結果の概要を説明した。

(2) 成果の発表

和歌山県栽培漁業推進協議会